

第6回 宝塚歌劇団月組男役

蓮つかささん

個々を尊重のびのびと

宮城県古川高は2005年、男女共学になり、女子生徒の入学が始まりました。「文武両道」「個々を尊重」「のびのび」——。宝塚歌劇団月組の男役、蓮つかささんが振り返る母校の「良さ」は、伝統が脈々と引き継がれていることを示しています。



進学校だったので、今後のことも考えて一番いいかな、と古川高にしました。

入ると、あれ、すごいまじめな学校に入っちゃった、勉強はちゃんとしなきゃな、と感じました。でも、自由だったし、文武両道というか、部活動とか文化祭や体育祭といった行事に集中して熱心に取り組む学校でした。

周りの女子も勉強に没頭する子、着飾らない子が多かった。（宮城県）築館高（栗原市）との定期戦前の応援練習では女子ってちょっと遠慮するので、「声出せ!」「恥ずかしがるな!」と言われましたが、応援は男女関係なく「古高に入ったからには、勝つ」という感じでした。

演劇部に入っていました。ただ、途中から自分の習い事が忙しくなり、表に立ったことはありません。途中で一度辞めたクラシックバレエを、高校に入ってからまた始めました。市民ミュージカルに小学3年から入り、お稽古は週1回です。仙台に拠点があるのですが、古川でも上演しました。幼稚園の子も、おばあちゃん、おじいちゃんも一緒に一つの

作品を作るのはすごく楽しかったですね。

ミュージカルの先生が仙台の七夕祭りで路上パフォーマンスを依頼され、その演目として「織り姫と彦星（ひこぼし）」を踊りました。高校2年の時です。仙台の繁華街の道を通行止めにして、総勢30~40人。織り姫と彦星のカップルが12ぐらいあり、男性のパートでした。自分はこういうのができるんだって、宝塚を目指すきっかけになりました。

演劇部の合同演劇発表会の練習に行った古川黎明高の演劇部に大の宝塚ファンの子がいて、会うたびに宝塚の話をしました。最初は「あー、そーなんだ」って聞いたり、「入らないの?」と言われても「興味ないから」って答えたりしてたんですが、（七夕後）「ちょっと興味あるんで」と宝塚について教えてもらいました。入団したいと強く思うようになり、歌やダンスのレッスンを強化しましたが、高校2年では受かりませんでした。

1年と3年時に担任だった佐々木貴芳先生と相談して「中途半端にやらない方がいい」と、大学は受けませんでした。「学業は手を抜かない」と約束したので勉強も必死でした

が、赤点を取らないぐらいにですかね。周りには受かるまで「専門学校に入る」と言っていました。

古川高だからこそ進路の視野を広げ、私は宝塚（音楽学校）に入りましたが、いろいろな選択ができました。個々を尊重してくださる学校で、のびのびと学校生活を送れましたし、古川高を選んでよかったな、とすごく思います。同級生も卒業後、いろいろなところで活躍しています。自分の仕事を確立させた上で家庭を持った女子もいます。自分のやるべきことをきちんとやってる卒業生が多いですね。

れん・つかさ

旧古川市（現大崎市）生まれ。2011年、宝塚入団。同年、「めぐり会いは再び」で初舞台。17年、「All for One」新人公演で初主演を果たし、今年1月の「ON THE TOWN」では女役を演じる。趣味は、公演に関係する資料を探すこと。宮城や東北出身の後輩も募集している。毎年、東日本大震災の起きた3月11日に黙とうする。古川高同窓会による「後援会」も作られた。



古高小史⑥

05年に男女共学化

今年創立122年を迎える古川高は2005年から男女共学となった。「学校の雰囲気明るく、華やかになった」。02～11年に同高で音楽の教諭を務めた現教頭の加賀谷亮さんは振り返る。

加賀谷さんによると、周辺の中学校へは事前に「質実剛健などの校訓は変わらず、これまで通りの古川高として共学化します」と説明。同窓会も「新しい伝統を作っていければ」と理解を示したという。

当時、古川高のように単独で共学になった高校と、築館高と築館女子高の再編統合でできた（新）築館高のような高校があった。築館高とは毎年、スポーツや応援を競う「定期戦」がある。共学化初年度、3年生までいる相手に女子の「綱引き」で苦戦したが、「絶対負けないという気概を感じた」と加賀谷さん。また、卒業生でもある生徒の父親から「まさかうちの娘が入れるとは思ってもよらなかった。そういう時代になったんですね」と言われたという。

生徒は現在、男子381人、女子335人。共学化を「よかったと思っています」と加賀谷さんは語る。



古川高の「2019年学校案内」には伝統の鉢巻きをした男女の生徒会メンバーが並ぶ写真も＝古川高提供